和歌

古今和歌集　―　現代語訳　―

立春の日に詠んだ（歌）

（夏に）袖も濡れ（るほどにし）て両手ですくって飲んだ水が、（冬になって）凍っていたのを、立春になった今日の（暖かい）風が解かしているだろうか。

桜の花が散るのを詠んだ（歌）

陽の光がのどかにふりそそぐ春の日に、どうして落ち着いた心もなく（桜の）花は散るのだろう。

作歌事情は不明

五月を待っているかのように咲いている橘の花の香を嗅ぐと、昔親しかった人の袖の香りがするよ。

立秋の日、詠んだ（歌）

秋が来たと目にははっきり見えないけれども、風の音で（秋が来たと）気づいたことだよ。

神代の昔にも聞いたことがない。竜田川では美しい紅色に水を絞り染めにするとは。

冬の歌として詠んだ（歌）

山里は（いつも寂しいが）冬が（なんといっても）寂しさがまさることだよ。人の訪れも絶えて離れてしまい、草も枯れてしまうと思うと。

作歌事情は不明

（ひたすら恋しいあの人のことを）思いながら寝たので、あの人が（夢に）見えたのだろうか。夢だと分かっていたならば、目覚めないでいたのに。

五節の舞姫を見て詠んだ（歌）

大空を吹く風よ、雲の中の通い路を閉ざしておくれ。天女の姿をもうしばらく（地上に）留めておこう。